

リーディングスキルテストの共同研究



リーディングスキルテスト (RST) とは、生産力や伸びることが求められる変動的時代の基本スキルである汎用的基礎的読解力 (リーディングスキル: RS) を測るためのテストです。このテストは、コンピュータ上の読解 (CBT) で実施し、主観的読み取り (褒め褒め解析) や、新しい概念の理解 (具体例判定) など、6タイプからなる基礎的読解スキルを測定します。とどっさり読める学力向上を目指すより、すべての能力を支えるRを、様々な教科の学習を通じて育む必要があります。

■本年度の戸田市リーディングスキルテストと県学力調査の結果から
戸田市でのRSTの実施は平成28年度に開始し、6年目に当たる本年度は、小学校4校、中学校2校が実施されました。本年度のRSTと埼玉県学力・学習状況調査 (以下 県学力) の結果の関係について新しい分析結果を報告します。

(1) リーディングスキルテストと県学力調査の関係 (国語)
以下の表1はRSTのDEPからINSTまで6領域 (INSTはINSTとINSTmに分類されます) の成績と県学力の国語の成績との相関係数を求めたものです。相関係数は-1から1の範囲の値となり、正の値を取る場合には、両者 (RSTと県学力) の間にある程度の正の相関関係があると解釈できます。表1を見ると、どの学年においてもRSTのすべての領域が国語の成績と正の相関を持っています。これは、RSTのすべての領域が国語の成績の土台になっていることを表しています。

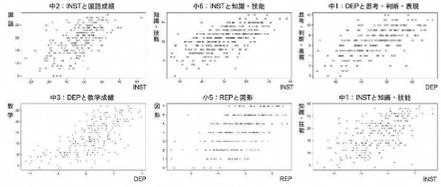
Table 1: RST and National Academic Achievement (Language) correlation coefficients. Columns: DEP, ANA, PARA, INF, REP, INST, INSTd, INSTm. Rows: 小6, 中1, 中2, 中3.

さらに詳しく見ると、相関が高い (1より近い) のはDEP、ANA、INSTといった領域であることが分かります。DEPは文と文の関係性を正しく把握する力であり、読解力の基となる能力です。ANAは「その」「それ」といった代名詞が何を指しているかを正しく把握する力です。INSTは辞書の定義を用いて新しい言葉とその用法を推察する力です。自ら新しい概念を推察する場合にはINSTの能力が必要となります。DEPやANAは文章を理解するための基礎となる力ですが、小学生高学年や中学生であっても、そのような力を伸ばすことが国語の学力にとって重要であると言えます。さらに、特に中1-中2-中3と年齢が上がるにつれて重要性を増す傾向を窺うことができます。これは、RSTを伸ばすことが学年が上がるにつれて重要性を増すことを意味します。

Table 2: RST and National Academic Achievement (Mathematics) correlation coefficients. Columns: DEP, ANA, PARA, INF, REP, INST, INSTd, INSTm. Rows: 小6, 中1, 中2, 中3.

さらに詳しく見ると、相関が高い (1より近い) のはDEP、REP、INSTといった領域であることが分かります。REPは文と非言語情報 (図) を正しく対応する力です。REPの領域は算数・数学の教科書等に登場することが多く、理解を深めることや問題を求めることに関与しているのではないかと考えられます。また、DEPは算数・数学の教科書以外にも多くの問題を作成しています。これらのことから、RSは算数・数学という一見すると関係ない科目の学力にも影響していることが分かります。

(3) リーディングスキルテストと県学力調査の散布図
これまで述べてきた相関係数の様子を図で表します。これを見て、横軸のRSが大きな児童生徒はどの程度国語の成績が良いのか分かります。県学力の3の階層がそれぞれ、指導要領に記載されている国語・算数・数学の領域や評価観点のうちのいずれかであることが分かります。そこで、全領域の成績とは別に領域別成績と評価観点との関係も求め、RSとの関係を示しました。「知識・技能」「思考・判断・表現」「図形」がそれぞれあります。



国語と数学の「知識・技能」「思考・判断・表現」は、指導要領において国語科や算数・数学科で育成を目指す資力、学力の3本柱のうちの一つであり、DEPやINSTといったRSと関係があることが分かりました。
本年度、RSを継続して進捗するとともに、RSTの各領域と県学力調査の結果を踏まえて、さらなる研究蓄積を生かし、効果的な指導方法をみなさんと共に検討していきたいと考えています。

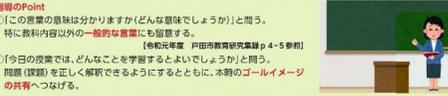
戸田市教育委員会HPよりダウンロード可 40

リーディングスキルテストの視点に基づく授業改善3 ~研究校の実践に基づいた授業メソッド~

汎用的な基礎的読解力を測定するリーディングスキルテスト (RST) は、人間の読解プロセスである6つの視点 (①褒め褒め解析②関係解決③問題解決④同義文判定⑤イメージ判定⑥具体例判定) から作成されている。市内のR5研究校では、この6つの視点を取り入れた授業改善に取り組んでいる。

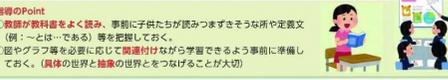
導入 ~本時の問題 (課題) を正しくつかめるようにするために~

- 教師が提示した問題文 (課題) を正しく読めるよう指導する。
問題文や目標等を子供たちに提示できるように指導する。
問題文 (課題) を正しく理解できるようにするとともに、本時のゴールイメージの共有を促す。



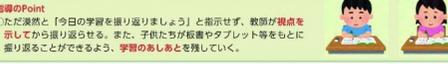
展開 ~子供たちの理解を深めるために~

- 文章が書かれていない主題や述語を補う。 (主題や述語を問う場合もある)
指示代名詞 (それ、これなど) が示す言葉を明確にする。
根拠に基づき読み取ったリ、グラフや表から事実を説明したりする活動を行う。
文章の意味を自分の言葉で表現する活動を取り入れる。
理解が曖昧な言葉は、教科書や辞書を使って調べるようにする。



終末 ~授業を振り返ることができるようにするために~

- 今日学んだことから「わかったこと」「わからなかったこと」「次回やりたいこと」を発表させる。
新しく学ぶ用語を使って、文章を書く場面をつくる。



過去の関連資料 QRコード R01 RSTの視点に基づく授業改善2 H31 RSTの視点に基づく授業改善1

リーディングスキルテストの視点に基づく授業改善4 ~研究校の実践に基づいた授業メソッド~

- 褒め褒め解析: 文の構造を正しく把握する。 (主題・述語や修飾語・補語修飾語など)
関係解決: 代名詞が何を指しているかを正しく把握する。 (「これ」「それ」「その」など)
同義文判定: 与えられた文が同義文かどうかを正しく判断する。
推論: 既存の知識と新しく得られた知識から論理的に判断する。
イメージ判定: 文と非言語情報 (図・グラフなど) を正しく対応する。
具体例判定: 語彙の定義を用いて、新しい言葉とその用法を把握したり、数値的な定義を理解し、その用法を適切に用いる。

I 子供たちのつまずきを防ぐための教材研究

- 教科書を読み、本単元や本時の授業でおさえる言葉を確認し、授業プランを検討する。
教材研究シート
教材研究を生かす大例
子供たちのつまずきを防ぐための教材研究

II 子供たちの学びを支えるための授業展開

- 課題やめあて、学習内容の明確化
本単元や本時の授業の課題やめあてを丁寧に確認し、児童生徒自身に学習活動を理解させる。
課題やめあての具体的な活動
課題やめあてと一緒に書いて (書き込み)、発表させたりしてから、音読する。
既習事項で今回の学習に促せるものはないか、どこかことを学習すればよいのか児童生徒が考えさせるようにする。

- 情報の工夫
児童生徒の理解が曖昧な点について切り直し発問を行う。
切り直し発問を行う場面例
児童生徒の発言が抽象的とき
児童生徒の発言が具体的とき
児童生徒の発言が曖昧なとき
児童生徒の発言が具体的なとき

- まとめ・振り返りの充実
本単元や本時の授業で学んだ用語や知識を使って、文章を書いたり、問題を解いたりする場面を設ける。
本単元や本時の授業の振り返りを行い、子供たちに学習内容を言語化させる。
振り返りの例
今日の授業で「分かったこと」「わからなかったこと」を書いてみよう。
次の日の学習を自分のペースで進めよう。
まとめと振り返りの学習活動について考える。

III 子供たちの学習状況を確認するための授業分析

- 振り返りやテストの結果等から児童生徒の正しく学習理解や定着を理解しているかを確認する。

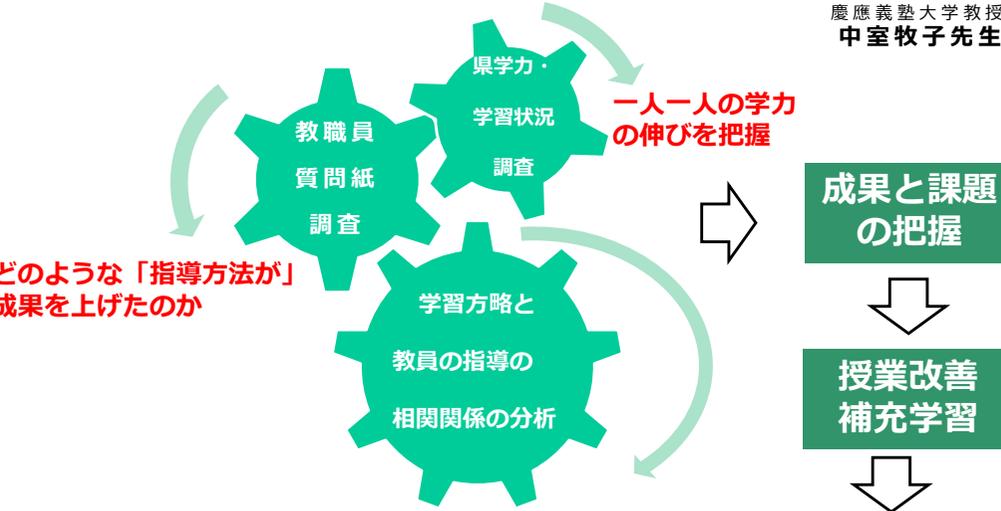
分析を生かして、次の教材研究を行うことで、効果的な授業改善につながる。 戸田市教育委員会HPよりダウンロード可 41

エビデンスに基づく教育施策の推進

埼玉県学力・学習状況調査 (IRT) 等と教員質問紙調査等の分析結果の活用 (慶應大学との連携)



慶應義塾大学教授 中室 牧子 先生



どのような「指導方法が」成果を上げたのか

新たな教育計画の策定及び実施 42

エビデンスに基づく教育施策の推進 ~調査分析結果~

慶應義塾大学 中室 牧子 研究室との共同研究

戸田市版AI指導用ルーブリックの項目に沿って再設計する。

教員質問紙調査

教員の指導方法と学力の伸びとの相関関係をダイレクトに分析・活用できる。(Googleフォームにて実施)

年々の学力テストでも60点だった場合は、学力の低下傾向は明らかです。スタンフォード大学のラージ・Nデータ分析では、アメリカの人達に送達する小学校3年生から中学校2年生までの230万人の読解力のスコアを分析して、付加価値の高い教員の指導を受けた生徒は、大学進学や、進学した大学の満足度、生活満足、貯蓄率が高いこと、10代で好まれるブランドのスコアが高い傾向があることが分かってきました。...



Table with columns for 調査項目, 調査結果, and 調査方法. It lists various survey items and their results.

43

